

ブラジル特報

Notícias e Informações

No. 1617

2013年11月号



サンパウロ市セアザ市場
撮影：酒井 芳彦氏（個人会員）

ÍNDICE／目次

- 社会・文化.....2
多文化共生と日本文化
木村 快
- ブラジルは「中所得国の罠」から
脱出できるか.....4
吉田 頼且
- 日本人が興したアマゾンの農業革命.....6
トメアスのアグロフォレストリー
大岩 玲
- 最近のブラジル政治経済事情8
—外務省中南米局提供情報その他より

- 日系企業シリーズ.....9
ホス建設
HOSS 建設とブラジル建築事情
大滝 守
- 文化評論
レシーフェのブックフェアを覗いて 10
岸和田 仁
- エッセイ
ブラジル人研修員と日本人をつなぐ
緩やかなネットワークづくり 11
竹中 平蔵、山崎 圭一
- イベント・新刊書紹介..... 12

発行：一般社団法人日本ブラジル中央協会

〒105-0003 東京都港区西新橋 1-1-15 物産ビル別館 1 階 電話 03-3504-3866 FAX 03-3597-8008

発行人：大前孝雄 編集人：桜井敏浩

URL : <http://nipo-brasil.org/> E-mail : info@nipo-brasil.org/

頒布価：700 円

多文化共生と日本文化

木村 快 (NPO現代座主宰)

日系ブラジル人

移民 70 周年の 1978 年、三ヶ月ばかりのブラジル取材のついでに、母のいとこ三家族の消息を尋ねた。わたしの父母は昭和の初めに当時日本の植民地であった朝鮮で結婚し、わたしは朝鮮で生まれた。だからブラジル流に言えば移民二世である。一方、母の叔父一家はブラジルのバストスに移住し、息子たち三人はサンパウロ州各地で生活を営んでいた。

わたしのために九家族が集まって歓迎のパーティを開いてくれたが、母の従兄弟たちは幼少期に移住したのと、戦後はほとんど日系社会との接触がないので日本語は不得意だという。その息子たちや配偶者、子どもたちの中にはスペイン系の血を引く者もいた。ああ、ブラジル人になるということはこういうことかと納得した覚えがある。当時は日本人移住地を訪ねても、すでに二世で日本語を話す人とはめったに会えなかった。

ところがアリアンサを訪ねてみると、ユバ農場では二世も三世もごく日常的に日本語を使っていた。ユバは特殊な農場だとは聞いていたが、それにしてもなぜここだけ日本語環境が残っているのか。サンパウロ市で話を聞く限り、ユバのような特殊な農場があるのは弓場 勇というカリスマ的リーダーがいたからで、弓場 勇は二年前に亡くなったから、遠からず農場は消滅するであろうというのが一致した意見だった。

消えゆく日本文化

17 年後、わたしはふたたびアリアンサを訪ねること



第 14 回 マッシュアード・デ・アシス
記念文化功労賞 2008 年 10 月、リオ・
デ・ジャネイロ市立劇場での授賞式
【撮影・神沢ルッシー】

になった。かつて訪ねた日本人移住地はブラジル人の街に変わりつつあったが、アリアンサは相変わらず日本的な村として存在しており、村の文化センター的役割を担うユバ農場には、日本では姿を消してしまった懐かしい日本が生きていた。あらためて日本文化を残す力とは何だろうと考えはじめた。

日本移民はもともと農業移民として移住したため、戦前は 90% が農業者だったが、1988 年の日系人調査では 10 % 少々に減っていたと



ユバ・バレエの演目では最も人気の高い「フェスタ」

いう。その代わり、日系は断然高学歴高所得者が多い。その反面、日本語を中心とする日本文化は姿を消して行くことになる。

戦前移住者の話を聞いて歩くと、もともと永住を目的にブラジルへ来たわけではなく、永住するしかないと考えようになったのは日本が戦争に負けてからだという人が多い。そうすると、子どもたちはブラジル人として高等教育を受けさせ、豊かで安定した生活をさせようということになる。子どもたちが街でホワイト・カラーとして生活するようになると、親は農業の跡取りがいらないので、農場を売ってサンパウロ市へ移り、移住地というコミュニティは衰退して行く。よくドイツ系と比較されるが、日本人はコミュニティへの執着が薄いといわれる。

生活文化というものはコミュニティに属していてこそ継承されるものであり、コミュニティを離れた生活を送れば都会文化の中に埋没していくのは当然である。

多文化共生と日本文化の課題

世界各地からの移民で構成されるブラジルは多民族多文化社会である。それはある意味で世界の縮図である。1970 年代からインテグレーションと呼ばれる多文化統合の動きがはじまっていたが、わたしが移住体験の聞き取りに歩くようになった 1994 年以後は社会学者カルドーゾが大統領に就任したこともあり、ブラジルを紹介するとき、「多文化共生」という言葉がよく使われるようになっていた。

多文化共生とは多数派少数派にかかわらず、ポルトガル系もドイツ系もインディオも、それぞれの民族文化を継承し、相互に影響し合いながらブラジル文化として統合して行こうということである。冷戦終結以後、混迷を深めつつある世界に対して、ブラジルが多文化共生を掲げることは、強い者に統合される時代を乗り越え、新しい共生の時代を切り開くのだという意志の表明を感じさせる。

そこで日系が継承すべき日本文化とは何かという問いが浮かび上がってくる。



コムニダーデ・ユバは2009年以来、ポントス・デ・クルトゥーラに指定され、ミランド・ポリス郡における受講希望者を対象に弦楽演奏を指導している



木下順二作『タづる』専門家の目で見ても現代の日本の若者では上演が難しいと思われる。

わたしたち日本人は、日常、日本文化とは何かなどという意識をほとんど持たない。あらためて自分の周囲を見渡すと文化状況は液状化し、何をもって日本文化とするかは判断しがたい。戦後は

ひたすら古くさい日本文化をふり捨てて近代化を急ぎ、今では経済のグローバリズムに翻弄されながら揺れ動いている。実はブラジルに残る日本文化が問われているのではなく、母国の日本文化とは何かが問われていたのである。

日本文化をどう見るか

2008年にアリアンサのコムニダーデ・ユバ（ユバ協同農場）が第14回マッシャード・デ・アシス記念文化功労賞を受賞して話題になった。これは連邦政府の多民族文化アイデンティティ局の推薦によるものである。

わたしの知るかぎり、日系社会ではアリアンサ・ユバはきわめて理解しがたい存在であった。農民バレエ団として知られる珍しい集団だが、生産活動とは無縁なバレエや演劇に夢中で、いまだに日本語にこだわる姿が理解できなかったのだろう。

では、なぜブラジル社会はユバを評価するのか。そこには日本人が考える日本文化と、多文化社会が求める日本文化との間に大きなギャップがあることを示している。

弓場 勇をリーダーとするユバ農場は、人間が組織に依存する農業を否定し、人間同士が助け合う農業を目指した。この点が前近代的と見なされた理由であったが、アリアンサはもともと移住者の自治を基礎として開設された移住地であったから当然の選択であった。

ユバ農場は①自然への祈り、②土から離れぬこと、③芸能による心の一体化、この三点さえ守れば、どのように働き、どのように生活するかは個人の自由としている。それが日本人の協同を生かす道だと考えたからである。

近代の日本社会が失った芸能についても、バレエや演劇を趣味としてではなく、人間を豊かにし、コミュニティの協同を持続させる大切な芸能として尊重した。この日本文化の特性を生かした芸術性がブラジル社会との接点となり、共感を広げていった。

協同のかなめはコトバである。コトバはユバ方言とも言えるべき、共同生活の中で培われた生活語を重視した。子どもたちの人格育成も生活語によって培う道をとった。

多文化共生という視点から見ると、ヨーロッパ系の合理主義的な協同とはちがって、ユバの協同はそれぞれが自由に働き、誰に対しても心を開く自然体である。ブラジル社会はこの西欧的合理主義とは異質な、それでいて魅力的な農民の芸術性を、多文化共生の一角にある日本独特の文化と見たようである。

日本文化の弱点を乗り越えて

日本文化は顔の見える範囲の小集団文化として積み重ねられてきた。そのため、無言のうちにお互いの胸の内を察するデリケートなコミュニケーションが可能で、知り合った者同士はごく自然に助け合う習性を持っていた。しかしその反面、よそ者に対しては心を閉ざしがちで、広い社会に対しても指導者まかせで、自分で考えることは不得手であった。

ところが個人を基礎とした西欧系の社会に単独で移住すると、風俗習慣も違い、個人としては対応できず、小集団に閉じこもりがちになり、アメリカでもブラジルでも同化しにくい民族と見られてきた。多文化社会ではこうした文化的弱点をどう克服するかが課題となる。だが、日本政府の移住政策は日本人特有の文化的特性には無頓着で、ただ移民を送り込むだけで、その後の成り行きは移民たちの自己責任とされた。帰国できない移民たちは厳しい生活を送らざるを得なかった。

20世紀初頭、アメリカで排日差別を受けた体験者永田 稠（しげし）や輪湖俊午郎らは、移民の生活を改善するため、ブラジル社会との共生を旗印に掲げ、サンパウロ州の奥地に協同組合方式のアリアンサ（和親・協同）移住地を建設した。その建設の主力は大正デモクラシーの影響下で育った日本力行会海外学校出身の力行青年たちであった。

アリアンサの建設はアリアンサ運動と呼ばれ、ブラジルに協同の夢を求める運動であった。永田は青年たちに「世界市民たれ！」と呼びかけ、経済的苦境に直面したときは「コーヒーより人を作れ！」と激励した。

アリアンサは移民社会では少数派であり、1927年から34年にかけては日本政府の干渉によって苦難の道を歩むことになるが、力行青年たちは弓場協同農場を結成してアリアンサを守る先頭に立った。弓場 勇はそのリーダーであった。そこから「アリアンサあってこそその弓場農場」とするユバイズムが蓄積され、継承されて行くことになる。その根底には顔の見えるコミュニティを文化の基盤とする、伝統的な日本文化が息づいていた。

21世紀が多文化共生の時代であるとしたら、わたしたちは自ら捨て去った「顔の見える文化」をもう一度見直し、異文化と共生する新しい道筋を探る必要があるように思う。日系同胞はわたしたちにとっては異文化接触の先駆者であり、その試行錯誤の歴史は母国日本に新しい道筋を示すだろう。



編集部注：筆者には本テーマに関連した『共生の大地 アリアンサーブラジルに協同の夢を求めた日本人』同時代社 2013年8月および『異文化の中の日本 国際時代の先駆者 ブラジルの日本人』同時代社 1996年7月等の著作がある。

ブラジルは「中所得国の罠」から 脱出できるか

吉田 頼且
(拓殖大学国際学部教授)

「中所得国の罠」に落ちたラ米諸国

「中所得国の罠」は、世界銀行が2007年に提示した概念である。ある国の一人当たり所得が世界の中レベルに達した後、その国の発展戦略や発展モデルの転換をうまく実現できなかったために、新たな発展の原動力を見つけれず経済が長期にわたって低迷することを指す。

「中所得の罠」の本質は、工業化の未完成であり、ラテンアメリカ諸国は、輸入代替工業化戦略に頼りすぎて国内市場と国際市場が長期にわたって分断され、国内市場の縮小と国際競争力の低下により、国際収支と国内経済構造が悪化し続けた結果、経済が長期停滞に陥ってしまった。

ブラジルは、1980年代から2000年まで、一人当たり実質GDPが4,000ドル(2000年価格)以下で低迷し、アルゼンチンなど他のラテンアメリカ諸国も含めて、いわゆる「中所得国の罠」に陥った諸国のひとつといわれてきた。

ブラジル、アルゼンチンなどラテンアメリカ諸国は、1960年代から70年代に低所得国から中所得国に移行したが、80年代の債務危機をきっかけに長期停滞の局面に入ってしまった。

関(2013)によれば、貧富の差が大きく、社会の流動性が低いことが「中所得の罠」に陥っている国々に共通する現象である。所得格差の拡大よりも深刻なのは社会階層が固定化することで、各階層間の移動が容易であれば、経済と社会の活力を維持することも可能であるが、そうでなければ社会が不安定となり、経済発展も停滞、後退する恐れがあると指摘している。さらに、韓国、台湾などは、農地改革によって、農業の生産性を向上させることを通じて、余剰労働力の他部門への大規模な移転を可能にした点や、工業部門で開発した技術をうまく農業に応用し、農業の発展と近代化に注力した点が貢献したと指摘している。

しかし、ブラジルは、2000年代に入ってから、中国をはじめとする新興国の資源需要をとりこんで経済成長を果たし、一人当たり実質GDPも5,000ドル(2000年価格)以上まで上昇した。中間所得層増加による社会階層の移動も進み、所得格差の指標であるジニ係数もいまだ高い水準とはいえ、2000年代を通して数値は徐々に改善している。はたして、ブラジルは、今後「中所得

国の罠」から脱出することができるのだろうか。

罠から脱出した韓国、台湾

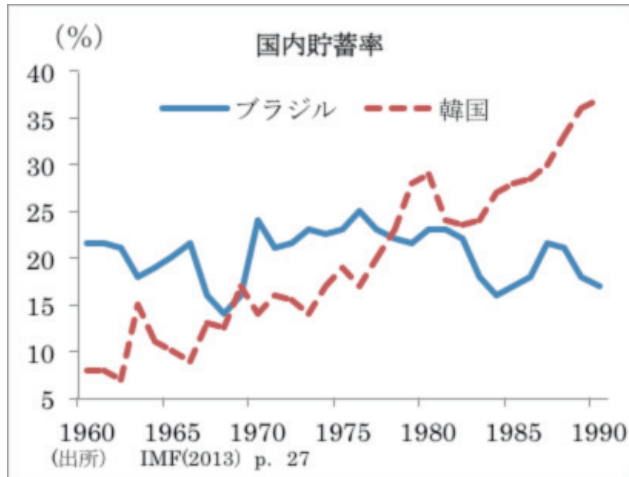
「中所得国の罠」から脱出し、高所得国に移行した国として、韓国や台湾などがあげられる。1960年代から70年代にかけて、ブラジルの一人あたり実質GDPは、韓国と大差ない水準であったが、80年代以降韓国に差をつけられ、現在では3倍以上の大差に拡大している。IMF(2013)によれば、60年代には、ブラジル・韓国両国とも経常収支が赤字で、工業化による経済成長をめざしたが、資金調達を国内貯蓄に依存した韓国に対し、ブラジルは、国内貯蓄ではなく、海外借入と財政赤字に依存したことが原因と指摘している。韓国は輸出増による発展戦略を採用した点も特筆される。

さらにブラジルは、投資不足によって港湾・道路・鉄道等のインフラ整備が遅れており、長年投資不足がブラジル経済の弱点と指摘されてきた。国内貯蓄率の低い経済は投資率も低いとの指摘がある。

では1990年以降ブラジルの投資率や貯蓄率はどのように推移しているのだろうか。森川(2013)によれば、ブラジルの対GDP比投資率は、91年以降平均20%にとどかず、BRICs諸国(ブラジル、ロシア、インド、中国)の中で最も低く、ラテンアメリカ地域の中でも平均を下回っている。ブラジルより低い他地域の新興国は、サハラ以南のアフリカ諸国だけである。またブラジルの公共投資は、GDPの3%弱に過ぎず、インフラ整備については、航空・港湾・鉄道・道路のいずれも中国、インド、ロシアに比べて低く、東南アジアと比べるとさらに差が広がると指摘している。

二宮(2011)によれば、『国際競争力レポート2010-2011年版』を見ると、ブラジルの港湾インフラに対する評価は、調査対象国139ヶ国中123位と低順位にランクされている。

一方、日本経済新聞(2013年9月13日付)によれば、韓国の国内市場は、従来少数の国内企業が高いシェアを占め、その利益が国内企業の研究開発費用を支えてきた。現在国内市場が外資系企業の激しい輸入攻勢にあっているが、それでもサムスン電子は、昨年度12兆ウォン(約1兆1,000億円)を研究開発投資につぎ込み、本年度も過去最高ペースの投資が続いていると指摘している。



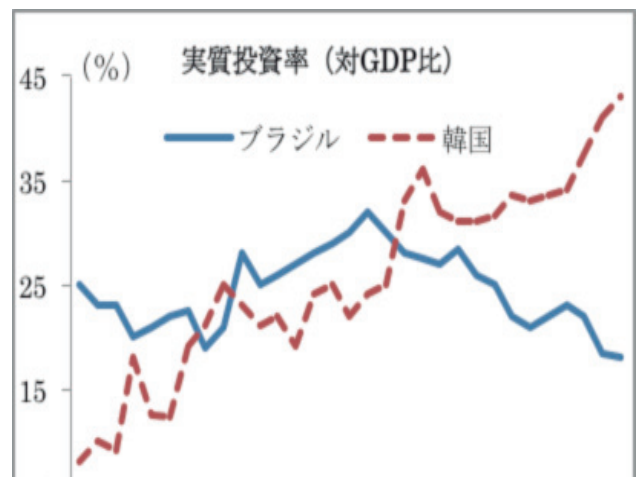
貯蓄率に関しては、森川（2013）によれば、1996年～2011年のブラジル国内貯蓄率は20%以下であり、これは約20%のラテンアメリカ諸国平均を下回り、約40%超の新興アジア諸国には2倍以上の差をつけられている。貯蓄率の向上は、国民文化的要素が影響しているの一朝一夕には困難だが、税制インセンティブの付与等の制度的対応や、国際的にみて早い年金支給開始や高い支給金額等年金制度を見直す必要を指摘している。現在の年金制度は貯蓄意欲を低下させる原因の一つともいえる。

ポピュリズム政策が前面に

ブラジル政策当局の投資、貯蓄増強策については、検討はしているものの、大統領選挙を2014年に控えており、福祉充実等ポピュリズム政策を打ち出さざるを得ず、当面政府のリーダーシップ発揮を期待するのは困難であろう。中間所得層の厚みが増している点や貧困層の減少はプラス材料だが、本年6月サッカーのコンフェデレーション杯の際には、インフレ高止まりへの不満から、低所得層から中間所得層まで幅広い階層がデモに参加しており、強い政治的圧力団体層と化した。

また、ブラジルの経済成長率については、本年度2%台と予想されており、資源輸出は従来のような高い需要は期待できないと見られることから、経済成長面からも当面厳しい状況が継続すると予想される。最大の資源輸出相手国の中国は、もはや10%を超える経済成長は期待できず、従来8%が失業等社会不安を生じさせないための目標経済成長率となっていたが、中期目標を7%に下方修正した。中国は米国に次ぐ経済大国である点是不変のもの、世界銀行（2012）は、『2030年の中国』において、中国が「中所得国の罠」に陥る可能性があると指摘している。

ブラジルにとって、中国市場は引続き有望な一大市場ではあるが、今後経済回復が期待される米国市場の重要性が増してくると思われる。米国市場の開拓を図るためには、米国と対峙的な外交政策も見直すべきであろう。メルコスール諸国をはじめとするラテンアメリカ市場もブラジルにとって重要な市場である。ブラジルは南米諸国にサプライ・



チェーン・ネットワークを張り巡らしており緊密な貿易関係を維持する必要があるが、米国市場をめざすためには、アルゼンチンやベネズエラ等極端な反米諸国の意向を重視すべきではなく、むしろTPP（環太平洋経済連携協定）や「太平洋同盟」参加国のチリやペルー等との関係を重視すべきであろう。市場として中国以外のアジア地域も重視する必要がある。

投資率・貯蓄率の向上がカギ

結論として、今後予測されるブラジルの厳しい経済状況を勘案すれば、当面「中所得国の罠」から脱出するのは期待できないといわざるを得ない。しかし、中間所得層の拡大による社会階層間の流動化は引続き進展するとみられ、中長期的に貧困層の減少による所得格差縮小の方向は変わらないであろう。

農業の生産性向上による農業発展と近代化も注目すべきものがある。したがって、ワールドカップやオリンピック開催によるインフラ整備投資の機会を生かし、消費過熱を抑制し、中長期的に、投資率・貯蓄率の向上が果たせれば、「中所得国の罠」から脱出する可能性を十分有しているといえるのではなかろうか。

（2013年9月30日記）

（主要参考文献）

関 志雄（2013）『中国 二つの罠』、日本経済新聞出版社。

森川 央（2013）「ブラジル経済の現状と課題」『国際経済金融論考』、国際通貨研究所。

二宮康史（2011）『ブラジル経済の基礎知識』、ジェトロ（日本貿易振興機構）。

IMF（2013）“The Growth Comeback in Developing Economies: A New Hope or Back to the Future” WP/13/132, International Monetary Fund.

World Bank（2012）China 2030: Building a Modern, Harmonious, and Creative High-Income Society, World Bank.

日本人が興したアマゾンの農業革命 トメアスのアグロフォレストリー

大岩 玲（在ベレン日本国総領事館領事）

はじめに

最近、日本に住む家族や友人から、筆者の住む「アマゾン」を街中やテレビ、インターネット上で見たという声を聞く機会が増えた。彼らが目にするアマゾンは、熱帯で奮闘する日本人開拓者、地球を環境破壊から救うアグロフォレストリー、美容と健康に効くアサイーのデザートなど様々で、かつての「魔境、神秘」とは別のアマゾン像が日本人を魅きつけていることが分かる。同時に、これら新たなイメージは、現代アマゾン理解のためのどれも重要なキーワードであり、相互に強い関係性を持っているといえよう。

本稿では、アマゾン地域、特にパラ州における日本人移住者とアグロフォレストリー（以下、SAF¹）の歴史と現状を概観するとともに、SAFを通じて、現代ブラジル社会が抱える課題や、日本とブラジルの新たな関係に係る考察を試みる。

日本人移住とアグロフォレストリーの導入

日本人の本格的なブラジル移住は、1908年の笠戸丸のサントス港到着をもって始まった。移住者は、苦労を強いられながらも徐々に農業者として高い評価を得ていったが、日本人の活躍とともに黄色人種排斥論も勢いを増し、23年に外国人移民の制限に係るレイス法案が下院に提出されると、日本人のサンパウロ等以外への分散が検討され始めた。25年、親日家のベンテスがパラ州知事に就任し、アマゾン開拓の担い手として日本人に白羽の矢が立つと、26年に日本の官民から成る移住調査団がベレンを訪れ、29年9月には南米拓殖会社（以下、南拓）のトメアス入植地に第1回アマゾン移住者189名が到着した。

南拓は、事前調査によりトメアスの主要栽培作物をカカオに決めていたが、収穫までに2～3年を要するため、一刻も早い現金収入を求めていた移住者のニーズに合わなかった。トメアスの日本人は徐々にカカオから離れ、米、野菜等の栽培を試みつつ、原生林の開墾やマラリアと格闘する日々を送っていた。

第二次世界大戦の開戦とともに、枢軸国との国交断絶を決めたブラジルでは日本人は敵性国民となった。トメアスでは日本、ドイツ、イタリア人用の収容地も設置され、さらなる苦労も強いられたが、戦争は誰も予想しなかった富をもたらした。東南アジアのコショウ生産地が戦火の被害から立ち直れない中、コショウ相場は徐々に高騰し、戦後、日本人移住が再開された1953年頃には相場は最高潮に達し、「黒いダイヤ」と呼ばれる時代が訪れた。コショウは、33年に南拓社員の白井牧之助によりシンガポールから20本の苗が持ち込まれ、その内の2本がトメアスで活着し、栽培が始められていた。戦前、戦中はコショウは安値で推移したが、日本人は徐々に栽培量を増やしていた。

コショウの成功で多額の現金を手にした日本人もいたが、熱帯雨林を焼き払い、むき出しの耕地に高密度で植えるモノカルチャー（単一栽培）は、半陰性の蔓植物であるコショウに適した栽培法ではなかった。その結果、1960

年頃からフザリウム菌による根腐病が発生し、70年代初めにかけてトメアスのコショウは壊滅的な打撃を受けた。そうした中、69年から約20年間、トメアス総合農業協同組合²（CAMTA）理事を務めた故坂口隆氏は、自給用の様々な作物の混植や多様な植物が共存する自然の摂理などから着想し、SAFの導入、普及に取り組み始める。同氏を中心とする日本人の試行錯誤により、70～80年代にトメアスではSAFの導入、確立が進められた。

トメアスのSAFは遷移型に分類される。焼畑後、まずは米、葉物野菜等の短期作物を植え、次にコショウ、カカオ等の中期作物を植える。中期作物は短期作物が雑草を抑えている内に生長し、高木樹も同時に生長する。すると、再生した複層林の中に収穫までの期間が異なる作物が存在し、常に収穫を得ることが可能となる。日本人は歴史的に木や森との関わりが深く、また、カカオなど実を付けるのに陰が必要な植物の存在が、トメアスでのSAF定着につながったと考えられる。空前のコショウ・バブルとその突然の終焉、それに屈しなかった日本人の知恵と伝統が、アマゾンのSAFに結実したといえよう。



トメアスのSAF農場（筆者撮影）

アグロフォレストリーのブラジル社会への貢献

CAMTAの現組合員数は約140人で、この内、移住者と日系人で8割を占める。大部分の組合員がSAFに取り組んでおり、非組合員でも、日系人の農家から独立してSAFを始めたり、CAMTAの指導を受けてSAFに取り組む零細農も増加傾向にある。トメアスの遷移型SAFは長年の試行錯誤を経て、カカオとアサイーを基本として、スイカや米等の短期作物と、高木樹としてマホガニー、アンジローバ（センダン科の木）などを組み合わせる形が概ね一般的となったが、ベストミックスを模索する取り組みは今も続いている。油ヤシ（デンデ）は、バイオディーゼル、食料品など用途が広く換金性が高いことから、パラ州北東部ではペトロプラスの子会社等による単一栽培も始まっているが、輸送コストが高く小規模栽培に適さない等の理由から、SAFでは採算がとれないとされてきた。そうした中、大手化粧品会社ナトゥーラは、CAMTAと協同

で SAF による油ヤシ栽培の技術および採算面の実証実験を進めている。

トメアスの SAF では、一部の農家を除き、10ha 前後の土地に常雇用者は 1～2 名程度³という小規模農家がほとんどだが、自給用ではなく商業的色彩合いが強いことで、世界の熱帯地域で広く見られる SAF の中でも稀有な存在となっている。トメアスでの SAF 導入の歴史は前述のとおりだが、市場経済と結びついた形で発展した背景には、日本人移住者がコショウの単一栽培での失敗経験を持ちながら、収益を得られる別の形の農業を模索していたことがある。また、主要作物の価格低迷とハイパーインフレで 1980 年代前半に CAMTA が一度破綻した後、再建計画を進める中で JICA の支援で建設した熱帯果実加工工場により、トメアスの SAF がさらに商業直結型となった点も重要である。一般的に、遷移型 SAF のメリットとして、(1) 低環境負荷で森林、土壌等の保全にもつながる、(2) 牧畜より雇用吸収力及び土地生産性が高い、(3) 単一栽培より病虫害や作物の価格変動の影響を緩和できる、等が挙げられる。さらにトメアスでは、CAMTA を中心とする普及活動で零細農の所得向上も進んでいることから、SAF を軸に環境・経済の両面で持続可能な社会を実現しているモデルケースとして、世界的にも注目を集めている。

2013 年 6 月のサンパウロのバス料金値上げに端を発した全国規模の抗議デモからも分かれるとおり、ブラジル都市部のインフラは人口規模に追いついていない。世銀(2012 年)によれば、ブラジルの総人口に占める都市部の人口比は 85%で、中国(52%)、ロシア(74%)、インド(32%)、メキシコ(78%)等他の新興国と比べても高い数値である。政府は都市部のインフラ整備を加速させるとしているが、短期間での改善は容易ではなく、農村部での雇用創出にもこれまで以上に取り組む必要がある。SAF による零細農の所得向上は、ブラジルの経済社会構造を変えるモデルとしても高い可能性を秘めているといえよう。

アグロフォレストリーと新たな両国関係



CAMTA 工場内部 (筆者撮影)

CAMTA が生産する熱帯果実ピューレは、ベレン市内の多くのスーパーで見られるが、アサイーを中心に、ブラジルの大都市や国外でも販路は開拓されている。日本国内では、フルッタフルッタ社が輸入したアサイー・ピューレ等を使った製品が多く、飲食店や小売店で販売されているほか、明治製菓は 2011 年より、トメアスの SAF カカオを原料としたチョコレートを販売している。これらは、嗜好品としては決して安価な製品ではないが、デフレ不況下の

日本市場でも着実に販売量を伸ばしてきた。背景には、アサイーに顕著な「健康、美容に良い」といった今の時代に即した付加価値以外にも、SAF 由来の製品を購入することで、森林保全や農村の雇用創出に貢献するという意識、さらには、日本人が苦勞の末にたどり着いたという「ストーリー性」も消費者の購買意欲に結びついたと考えられる。企業の社会的責任(CSR)の一環として、SAF 関連製品を扱うことも可能であろう。

SAF を通じて日本・ブラジル関係がより深化するには、



東京・渋谷のアサイーカフェ (フルッタフルッタ社提供)

原料の輸入からもう一步進むことも必要となる。原料を天然アサイーに過度に依存しては安定供給上のリスクが増すことから、日本企業による灌漑施設を備えた SAF アサイー農園への出資や、カカオ加工施設の整備なども考えられる。JICA では、トメアスの SAF の南米各国への普及を目的とした第三国研修を実施しており、アフリカ等への日本・ブラジル SAF 協力の範囲拡大にも期待が高まっている。

多くの日本企業が SAF 関連ビジネスに参入するには、生産物の高付加価値化も重要である。認証制度が確立できれば、トメアスの SAF は消費者の高い信頼を得ることができるが、遷移型の環境保全効果の科学的な証明や、トメアスの独自性の定義は容易ではなく、実現には時間を要すると見られる。一方、トメアスの一部の農家では、バニラや天然ゴム等の新たな換金作物の組み合わせが試されているほか、高級家具の原料として需要の多いマホガニーの伐採について、最近ブラジル政府が規制緩和の方向に踏み出したことは朗報である。

日本とブラジルは、日伯セラード農業開発協力事業(PRODECER)で不毛の大地を一大穀物地帯に変えた経験を持ち、その際にも多くの日系農業者の貢献があった。大前提である零細農の収入増に加え、SAF による両国間関係の深化により、ブラジル社会が抱える課題や、地球規模の問題も解決に近付くことが期待される。(本稿中の意見は筆者個人のものであり、外務省の見解を示すものではありません。)

トメアス移住初期の写真等にご関心のある方は、以下のサイトを参照下さい。<http://www.tomeacu-imigracao.com.br>

◇ ◇ ◇

1 ポルトガル語の Sistema Agroflorestal の略。トメアス(Tomé-Açu)の SAF として差別化するため、SAFTA という略語を使用することもある。

2 1931 年にアカラ野菜組合として設立、1949 年に CAMTA に改称。

3 通常、収穫期は 10～20 名の臨時労働者を雇う。

最近のブラジル政治経済事情

—外務省中南米局提供情報その他より—

デモ前後のルセーフ政権の支持率

9月27日付エスタード・デ・サンパウロ紙は、明年の大統領選挙に関するIBOPE社の全国140市の有権者2,012人を対象に実施した世論調査によれば、仮に本日大統領選挙が行われるとすれば、誰に投票するか問いに対し、本年3月以降の得票率は以下のように推移していると報じている。

	3月	7月(デモ直後)	9月(今回)
ルセーフ大統領(PT)	58%	30%	38%
シルヴァ元環境相(Rede)	12%	22%	16%
ネーヴェス上院議員(PSDB)	9%	13%	11%
カンボス・ベルナンブコ州知事(PSB)	3%	5%	4%

決選投票になった場合の調査結果(括弧内は前回調査との比較)。

(1) ルセーフ大統領 43% (8ポイント増)、シルヴァ元環境相 26% (8ポイント減)

(2) ルセーフ大統領 45% (7ポイント増)、ネーヴェス議員 21% (5ポイント減)

(3) ルセーフ大統領 45%、セーラ元サンパウロ州知事 21%

(4) ルセーフ大統領 46% (7ポイント増)、カンボス州知事 14% (5ポイント減)

ルセーフ大統領とシルヴァ元環境相の潜在的得票率(特定候補に「必ず投票する」と「投票する可能性がある」の計)は、それぞれ56%(前回比7%増)および43%(7ポイント減)となっている。「必ず投票する」に限れば33%対11%であり、逆に拒否率(特定候補に絶対投票しない)は、34%対36%で、シルヴァ元環境相は、ルセーフ大統領の対抗馬としての地位を不動のものにすることは出来なかった。その理由は、シルヴァ元環境相自身が6月の大規模デモで噴出した政治に対する不満の受け皿になりきれず、その波に乗り切れなかったことにある。ただし、ネーヴェス議員およびカンボス州知事の支持率も低迷していることから、シルヴァ元環境相は未だ2位を堅持しており、有権者の3分の1は投票先を決めておらず、この無党派層を取り込むことが出来れば勝機はある。他方、一部の無党派層のルセーフ大統領に対する拒否反応は2か月前に比べれば和らいできており、より多くの浮動票を獲得する候補が選挙を制することになる。

2013年第2四半期のGDP

8月30日、IBGE(ブラジル地理統計院)は、本年第2四半期の季節調整済み名目GDP成長率が前期比1.5%、前年同期比3.3%となったと発表した。最大の伸びは農業の3.3%であり、次いで製造業2.0%、サービス業0.8%となっている。また前年同期比では農業が13.0%、製造業2.8%、サービス業2.4%の伸びとなっている。今四半期までの4四半期累計ベースでは、前四半期までの4四

半期から1.9%の成長率となり、今四半期のGDP総額は1.2兆リアル(約41兆円)に達した。総じて今回の調査結果は市場の予測を上回るものであったが、今後もこの成長率が継続するかどうかは不透明との見方がなされている。

エスタード・デ・サンパウロ紙は、第1四半期の0.6%の成長率の後、ブラジル経済は動き出した。本年上半期の大方向の予想は、第1四半期と同等かやや上回る程度であった。マンテガ財務相によれば、本年の2.5%という成長率見通しはブラジルの潜在成長率を下回るものであるが、国際的な経済危機の最中にあることは「良い業績」と述べ、現在起こりつつある状況を「小規模な危機」と評し、米国の景気刺激策の終焉への期待からリアルが下落していることが原因であると述べたと報じている。

経済紙バロール・エコノミコ紙は、今回の1.5%は、前期に続いて再び金融市場を驚かせた。フィブラ銀行のエコノミストは、GDPの動きは少なくとも今四半期でブラジル経済(とりわけ農業と製造業)は、前四半期からいくらか回復してきたことを示したといえるだろう、しかし第3、第4四半期は再び失望させる結果に終わるだろうと述べて、本年の経済成長率見通しを2.3%程度に維持していると報じている。

2014年度政府予算案

8月29日に連邦政府は議会に予算案を提出した。その特徴は、(1)連邦予算および社会保障予算の歳出の88.3%は、社会保障費、人件費、国債償還等の義務経費で占められたおり、使途を政府が決定出来るのは歳出全体の11.7%に過ぎない。(2)14年度予算で重点配分されたのは、保健(前年度予算案比6.0%増)、教育(16.7%増)、インフラストラクチャー投資(21.1%増)の4分野。(3)14年度予算案の前提とした各種経済指標は、実質GDP成長率4.0%、名目GDP5兆2,429億リアル(約2兆4,000億ドル)、インフレ率5.0%、為替レート2.19リアル/1米ドル、SELIC(政策金利)9.3%、最低賃金(月給)722.90リアル(約29,000円)、13年の678.0リアル(約27,000円)から6.6%の引き上げ。

グシケン元広報長官の死去

9月13日、グシケン元大統領府社会広報庁長官は12年間にわたる癌との闘病の末サンパウロ市内の病院にて死去し、大統領府はルセーフ大統領およびシャガス社会広報庁長官による弔意を発表した。ルイス・グシケン氏は1950年サンパウロ州オズワルド・クルス市で沖縄出身の日本人(具志堅)一家の長男として生まれ、82年のPT(労働者党)および翌年のCUT(中央統一労組)設立の立役者の一人であり、88年にはPTの全国党首、ルーラ第1期政権時で2003~05年の間大統領府社会広報長官を務め、ルーラ大統領の信頼が厚かった。05年のメンサロン事件において公金横領で起訴されていたが、証拠不十分で無罪判決が出ていた。

第 27 回

ホス建設

HOSS 建設とブラジル建築事情

大滝 守
(HOSS 建設取締役)

ブラジル清水建設を現地化

1804 年に創設され世界中で知られている清水建設の子会社としてブラジル清水建設は 1973 年に設立されました。清水建設のブラジルでの業務停止にともない、ブラジル清水建設は 2001 年 12 月に現地化し役員、事務所の変更なく「ホス建設」へ社名変更しました。現在、サンパウロ本社、マナウス、スマレ市に支店を持ち、約 150 人のスタッフと工事作業社員約 1,000 人が工事作業所に就業しております。

ブラジル各地で各種建築工事を行っていますが、ブラジルの建設工事計画に悩ましいのは許可申請期間が長くスローテンポで進むため、なかなか許認可を受領する時期が予想にくいことです。これは建設の許可に限らず、どのお役所仕事でも時間がかかり、想定して組み立てた工程表通りに進まない事が多々あるのが現実です。

ここで私なりになぜブラジルのお役所仕事がスローテンポであり、申請許可に時間がかかるのか、原因を考えました。建設工事については、市役所管轄以外の許可(州の役所の管轄)が多くあり、許可書類が連動しないと(特に環境関係の許可が出ないと)次の審査が始まらないことや、市役所としても着工許可に手が出ない、といった状況があります。

手続きに関する経路や法律・条例が多く、申請する側が理解することが難しい事もあげられます。

一般的に役所にはサービス精神がありませんので窓口で指導、確認を直接受けることが難しいのです。

最近、役所の汚職を防ぐため役人と申請者が会うことを禁じているところもあります。せっかくひとつの許可書類がでても次に別の新しい書類を出す必要があったりし「どうして一度で教えてくれないのか?」と不満が高まります。ブラジルでは建設工事に関する法例・条例集の入手が難しいのが現状で、役所としてはみせたくない、自分達のみが知っていたい、という意図がある様にすら感じます。

ですから、許可審査は係官の裁量判断に任せるところが多く、係官の気分により左右される指導箇所が多くなります。係官の審査途中に COMUNIQUE-SE という是正命令書が申請者に来るのですが、工事変更が増えるような変更命令がある場合もあります。そのやりとりによりまた時間を要します。

ブラジルの公務員資格についてはまだ理解していないのですが、申請担当者についていえば勤務時間があいまいで効率は悪そうです。係官は副職をもっており役所の勤務は短時間であっても受け付ける書類は山積みです。書類はいろいろな部署を回り、時には書類を紛失する場合があります。



建設現場での朝礼風景

りと、書類の進捗に目を離せません。

市役所が申請許可を出さなければならない期限は法例で定められていないので、時間がかかろうと訴えることができません。

このような悪条件のなか、(設計者でもある)私自身もあの手この手で早く許可書を取得するため役人相手に交渉した経験があります。これから工場建設・進出を考えている企業様は前述のような時間のかかる状況を理解された上で余裕のある日程計画づくりをお勧めします。また、市役所へのヒアリングも話し合い程度で終わり、市役所側が約束事を守らないケースも多く、現実には書類を提出して審査を進める中で確認するとか、文書で約束事にサインをして残す等、ブラジル人特有のリップサービスには惑わされないように対策を講じるのが大切だと思います。

工事従業員が 1000 人

ところで、弊社では常時直雇用で 1,000 人程の工事作業員(大工、左官、土工)を雇っています。弊社は建築工事がメインで工程・進捗を引っ張ってくれる作業員は正式な社員です。必要な手作業を下請に丸投げする建設業者が多い中、弊社はブラジル創業以来この方式で工事を行っています。作業員の中には勤続 20～30 年のベテランが多く働いて頂いています。作業員の多くは東北ブラジルからの出稼ぎや移住者で、弊社の仮設宿舎や常設宿舎に単身で長期間住んでいます。私も現場で作業員とともに働いた経験があるのですが、陽気な人たちが大半で、力仕事も厭わず汚い仕事、危険な仕事でも命令されたことは黙々と行います。日本の職人さんだとまず文句、不満がでるのですが、そのようなこともなく、皆が力を合せて監督の言うとおり施工してくれるので、毎度助けてもらいました。

ただ、学校とか職業教育を受けている人は少なく(最近では増えています)、経験で仕事を覚えてきた人が大半です。作業員や職人は勉強したりキャリアアップすることは全般的に苦手です。経験を大事にして勘を頼りに作業に当たっている所は立派でもあるのですが、もっとスピードを上げてキャリアアップして頂けるようにと考えています。

弊社としても故郷に残した家族への仕送りや年に数回の里帰りなどに協力するなど、家族的な運営をやっています。作業員の家族や親族の団結、同じ田舎から出稼ぎに来ているという結束力に助けて頂き、良い雰囲気で作業ができていることを幸いに思います。その表情にはブラジルのやさしさ、良さも見いだされ、ブラジル人のためにもっと建設を進め国の豊かさに貢献できればと考えています。

レシーフェのブックフェアを覗いて

●岸和田 仁（『ブラジル特報』編集委員、在レシーフェ）

第9回ペルナンブーコ国際ブック・ビエナール（開催期間：2013年10月4日から13日まで）というブックフェアを覗いてきたので、今回は、ブラジルにおける出版事情・読書事情についてちょっと考えてみたい。

ビエナールと名乗っているように、このブックフェアは二年に一回、隔年で、奇数年に行われている。第9回というから、第1回は1997年であったことになる。

筆者がこのレシーフェでの書籍フェアに行ったのは、記憶に間違いなければ2005年、2007年だったので、今回は3回目の参加となる。

会場のコンベンションセンターに出かけ、のべ三時間ほど歩き回って、ほぼ全ての出店ブース（ちなみに出展社数は160、ブースの数は325とか）を覗いてみたが、筆者にとって面白く、いささかコーフンしたのは、UNESP（パウリスタ州立大学）、UFPE（ペルナンブーコ連邦大学）といった大学出版会のブースと、地元ペルナンブーコの地方出版社のブースであった。購入しようと思っていたが、大手書店でも見つからず、予約せずに忘れかけていた本が、それこそゴロゴロ転がっていた、と思えたほどだったからだ。歴史や社会科学系統のものや地元出版物を主体に10冊ほど買い込んでしまったが、本によっては10%から30%もディスカウントされたので、満足度高し、であった。

さて、このブックフェアに来ている人たちの年齢層をざっと観察してみた。筆者が出かけたのは、土曜日だったが、半分以上は、学生というか小学校から高校までの青少年たち、学校の校名入りTシャツをお揃いで着ているのが多かったから、学校からいわれてきたのだろう。大人のほとんどは学校教員で、彼ら教育労働者以外の一般層（サラリーマン、公務員など）と思われる人たちは恐らく全体の2割もいないだろう。いささか独断的かもしれないが、このレシーフェ・ブックフェアの風景がブラジルにおける読書事情を反映している、といってよいだろう。

この辺をある程度裏付けるためにも、いくつかのデータをみてみよう。

ブラジルにおける年間販売冊数（百万部単位）をみていくと、1990年212、95年375、98年410、99年290、2000年334、05年270、06年310、09年454、という推移を経ている。この数値から読み取れることは、94年7月にスタートしたリアルプランによって超インフレ構造が“治癒”され、この経済安定が書籍市場をも活性化したことであり、98年末の通貨危機直撃で翌99年は大きくシュリンクしたものの、

その後順調に伸びてきた、ということだろう。前ルーラ政権による社会政策が功を奏して貧困層が新興中産階層へ格上げとなったことも、読書人口の拡大に貢献したといえるだろう。もっとも、同じ時間軸で、車の年間販売台数をみれば、80万～100万台レベルであったのが、300万～350万台となっているので、車はほぼ4倍のマーケット規模に成長したが、書籍市場は2倍ほどにしか伸張しなかった、とも解釈できよう。ブラジル国民の所得（一人当たりGDP）の伸びが、同期間で、ほぼ4倍になっているので、車市場の伸び率とぴったり合っているが、「お金が入ったら、まず車を買って、本代に回すのは二の次ないし三の次」という実態が再確認されたということだろう。

先進国と比較すれば、ブラジルの書籍販売市場規模は米国の15%前後、日本の25%ほどでしかないので、このレベルを維持する、とみるか、いや絶対数ばかりか相対的にも成長を続ける、とみるか、意見が分かれるところだろう。

常識的な見方は、ブラジル人は相変わらず本を読む習慣がないから、書籍市場の伸びは限定的だろう、というもののだが、さて、どうだろうか。

一例をあげてみたい。ジャーナリスト出身の歴史作家ラウレンチーノ・ゴメスが2007年から今年にかけて書き上げたブラジル史三部作『1808』、『1822』、『1889』が合計で150万部も売れたことをどう説明するか。ポルトガル王室がナポレオンへの恐怖からリオに移動したことで本国と植民地の関係が逆転した、という歴史からブラジルの近代史が始まるのだが、この辺を読みやすい文体で重厚な歴史物語に仕上げたことが、ブラジル人読者を惹きつけたのである。結構分厚い歴史書が、それこそスーパーでの特価品の如く本屋で売れて行ったのだ。

あるいは、今年9月に開催されたりオデジャネイロでの第16回ブック・ビエナール。66万人が訪れ、延べ350万冊が売れた。昨年8月開催されたサンパウロでの第22回ブック・ビエナールには80万人が訪れている。サンパウロ（偶数年）とリオ（奇数年）が交互でブックフェアを開催するようになって30年以上たつが、ブックフェアの先輩格はポルトアレグレだ。ここは毎年開催されており、今年は11月1日から17日までの期間に100万人以上の訪問者が予定されているが、第59回で、第1回は1955年だ。

サンパウロやポルトアレグレのブックフェアにも、筆者は何回も参加しているが、会場の熱気に圧倒された記憶がまだ新しい。ブラジル人でも本好きは少なくないし、読書習慣は全般的に広がっている、と断言しておきたい。

ブラジル人研修員と日本人をつなぐ緩やかなネットワークづくり

竹中 平蔵（慶応義塾大学教授、グローバルセキュリティ研究所所長）

山崎 圭一（横浜国立大学教授）

1990（平成2）年の入管法改正による、日系3世（法律用語では「日本人の子として出生した者の実子」）等を念頭においた「定住者」という在留資格創設をきっかけとして、ブラジルから日本への出稼ぎ者が増えたことは周知の事実である。外国人登録者統計でみると、この間のピーク時（2007年）で、在日ブラジル人は316,967人であった（法務省『平成24年版 出入国管理』による）。

この流れとは別に、以前から日本へ研修や研究にきている方々が大勢いる。留学生や客員教授などがその例だが、それ以外に、JICAの「日系研修員受入事業」での渡日者の総数が着実に増えてきた。1971年に海外移住事業団（JEMIS）が開始した制度だが、2011年までの実績で、計15ヶ国から4,697人を受け入れている（JICAの本事業紹介ウェブサイトより）。

ブラジルからの研修員で、無事研修を終えた帰国者のうち、学術研究に従事されている方々が中心になって、1992年にブラジル側で同窓会が結成された。日本語名は「ブラジル日本研究者協会」で、ポルトガル語名はSBPN（Associação Brasil-Japão de Pesquisadores、旧名 Sociedade Brasileira de Pesquisadores Nikkeis）である。これはブラジル政府公認の非営利団体（NPO法人）で、公式ウェブサイトの和文ページは以下である→http://www.japao.org.br/modules/xt_conteudo/。

その日本支部結成の機運があり、2009年に実現した。設立総会は同年6月20日に慶応義塾大学グローバルセキュリティ研究所で開催し、テレビ会議によるサンパウロ市の本部最高幹部（S.Niyama会長等）の御出席を戴いた。時差のためブラジル側は深夜となってしまう、申し訳なく感じたことが、記憶に新しい。

日本支部長には、本稿執筆者の一人竹中が就任する運びとなり、運営事務はブラジル銀行東京支店勤務の遠藤エリカ女史が担って下さることになって、現在に至っている。

竹中は、総務大臣当時、ブラジルが日本の地上波デジタルTV技術を採用する際の日本政府側の調印者であったという経緯（採用決定は06年6月）を1つのきっかけとして、日本とブラジルの学術・文化

交流促進の重要性を再認識し、微力ながら貢献活動として、この役を引き受けさせていただいた。遠藤氏はこの研修員受入事業の参加者で、横浜国立大学で1年弱の研修を経験している。本稿のもう一人の執筆者山崎は、遠藤氏の当時の受け入れ教員で、その縁で日本支部の活動支援に参加している。

日本支部の活動目的は、両国の学術・文化交流の促進である。具体的活動としては、第1に、最近の研修員を講師として招いて、ブラジルの経済、社会、文化などについての情報交換会・研究会を開催している。2009年8月に開いた第1回目の研究会以後、本年9月までに文系、理系をふくめて10名の専門家からブラジルに関する報告を拝聴し、質疑応答を通じて交流を深めた。

第2は、研修員に限らず日本でブラジルに何らかの形で関わっている日本人（研究者、ビジネス・パーソン、留学生など）と、滞在中のブラジル人（本研修員含む）の間のネットワークづくりである。

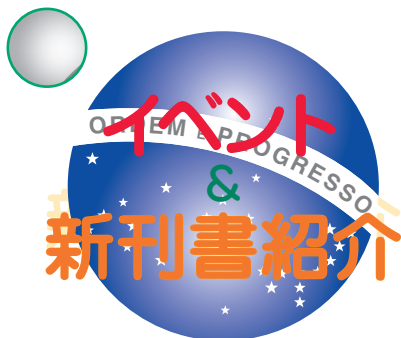
第3は、私たちがブラジルへ渡航して交流活動することで、10年10月、11年10月および12年12月に、竹中が現地（サンパウロ市内）で日本経済に関する講演会を実施した。演奏家の西陽子女史の琴リサイタルも催され、大好評であった。

異分野の交流なので、専門学会での学術交流では得られないような、ブラジルについての最新情報や知見が得られるといった効果が実感される。各参加者の生産物（論文等）に効果が多少反映されていると思われるが、日本支部としての成果物の誕生は今後の課題といえよう。

会合の頻度は数ヶ月に一度で、土曜日の17:30～18:30に慶応義塾大学グローバルセキュリティ研究所会議室で開催している。オープンで自由なサロンとして実施しているので、関心のある方は以下の事務局宛ご連絡いただきたい。

日本とブラジルの異文化が交わる、こうした異業種間ネットワークづくりの地味な活動の積み重ねが、両国の多様な分野でのイノベーションを誘発する礎石になると信じて、活動を継続する所存である。

連絡先：Erica Endo 宛（Eメール：sbpn_japan@yahoo.co.jp）



★ イベント ★

☆ランチョン・ミーティング (第24回)

日時：2013年11月20日(水) 正午～
午後2時

講師：シルビア・キクチ氏 (アイピー
シー・ワールド・キャスター)

演題：「テレビ・カメラに映る日本ブラ
ジル関係と在日ブラジル人コミュ
ニティ —ポルトガル語TV放送
ニュースキャスタの視点から—」

場所：アークヒルズクラブ (アーク森
ビル イーストウイング37階)
東京メトロ南北線「六本木1丁目」
または銀座線「溜池山王」下車

参加費：会員 5,000円 非会員 6,000
円 (当日会場にて申し受けます)

申込み：先着順 50名様まで。食事手配
の関係上、必ず事前に協会事務局
へ。お申し込み後ご欠席される場
合で、11月19日(火) 午後5時
までにご連絡頂けない場合は、参
加費ご負担をお願いいたします。

その他：ドレスコード (男性) ジャケッ
ト・ネクタイをご着用下さい。

☆年末懇親会

会員相互、さらにはブラジル関係者と
の意見交換や親睦を深めるため、年末懇
親会を催します。ブラジルポップスの歌
もありますので、是非ご参加ください。
会員でない方のご参加も歓迎します。

日時：2013年12月17日(水) 18:
30～20:30

場所：アークヒルズクラブ (アーク森
ビル イーストウイング37階)
港区赤坂1-12-32
Tel (03)5562-8201

地下鉄南北線「六本木1丁目」
駅3番出口より徒歩1分
地下鉄銀座線「溜池山王」駅 13
番出口より徒歩2分

食事：ビュフェスタイル (小テーブル、
椅子の用意あり)

会費：お一人 会員 (男性) 8,000円
(女性) 7,000円
非会員 (男性) 10,000円
(女性) 8,000円

ドレスコード：(男性) ジャケット・ネ
クタイはなしでも可

申込み：協会事務局へ

★ 新刊書紹介 ★

☆『共生の大地アリアンサ —ブ ラジルに協同の夢を求めた日本人』木村 快

農業を軸に共同生活と農民パレエ等の
文化活動を実践で名高い弓場農場のある
アリアンサ移住地の戦前戦後の通史。移
住地設立に尽力した輪湖午郎はじめ、日
本力行会の永田稠、信濃海外協会等との
移住地建設、村づくりなどの動き、太平
洋戦争下で敵性国民として取り締まりを
受け、戦後の再建、弓場勇等による芸術
拠点建設から、現在に至るまで変容があ
ったが、「コムニダデー・ユバ」の文化
芸術活動はブラジル政府にも多民族文化
共生と評価されるに至った。ブラジル奥
地のアリアンサ (協同) 精神の歴史を綴
った労作。(本誌本号の2～3頁にある
筆者の論考を参照)

(同時代社 2013年8月 2013年8月
350頁、3,500円+税)

☆『天使見た街 A sedução dos anjos』原 芳市

リオデジャネイロのカーニバルに魅せ
られ通いつめた写真家が、“天使に導か
れて”その踊り子たち、エスコラ (サン
バ連)、街角で出会った人々の表情を
撮った写真集。その心情を巻末に日葡英
語で語っている。(Place M 2013年8
月 85頁 4,600円+税)

☆『新興国家の世界水準大学戦略 —世界水準をめざすアジア・中南 米と日本』フィリップ・G. アル トバック、ホルヘ・バラン

学術システム、知の創造、伝達の中核
をなす存在である各国の研究大学が、資

金・人材・伝統等の制約の中で世界水準
の研究大学構築に挑戦している実態紹介。
ブラジルについては同国最古の総合大学
USP (サンパウロ州立大学) の位置づけ、
ブラジルの高等教育システムと大学院教
育について章を割いている。
(光澤彰純監訳 東信堂 2013年5月
386頁 4,800円+税)

☆『日系ブラジル移民文学 II —日本語の長い旅 [評論]』細 川 周平

日系移民の同人誌、題材、作品、人物
などを膨大な文献に当たって、戦前の農
村文学、戦後の様々な分野と形態の移民
文学、海を渡った移民が、日本の風土で
生まれた俳句、短歌をいかに移植したか
に至るまで、付録では石川達三の『蒼氓』
等の日本での移民小説も論じ、日系移民
文学の全容を記録しようとした、著者の
20年にわたる調査の貴重な記録と解析
の集大成。(みすず書房 2013年2月
784頁 15,000円+税)

☆『ボサノヴァの真実 —その 知られざるエピソード』ウィリ ー・ラウパー

ボサノヴァはブラジル庶民の伝統的な
音楽ではなく、1958年にボサノヴァの
生まれた背景、トム・ジョビム、ジョアン・
ジルベルト、ヴィニシウス・デ・モライ
スの3人の出会いからという通説に対す
る見解、評価すべきボサノヴィスタたち
の活動、海外に渡り、世界に広がったボ
サノヴァの今日的新解釈、他ジャンルと
の融合の試み、日本における歴史と現状
にまで言及している。実に豊富かつ様々
な事象の蘊蓄が満載されていて、ボサノ
ヴァの全容を知るうえで有用な手引き書。
(彩流社 2013年2月 462頁 3,000
円+税)

☆『ラテンアメリカ鉄道の旅 —情熱の地を走る列車に乗っ て』さかぐちとおる

世界の鉄道についての記述も多いライ
ターによる、ラテンアメリカ11カ国の
鉄道に乗る旅の紀行記。ブラジルについ
ては、リオデジャネイロの路面電車やコ
ルコバード丘への登山電車、サンパウロ
の地下鉄から広大な大地を走る鉄鉱石輸
送の路線を走る長距離鉄道を取り上げて
いる。(彩流社 2013年7月 310頁
2,200円+税)